

## 目取真俊「風音」論 — 沖縄戦の記憶をめぐる

## 1

過去のある行為や発言が実際にあったのかどうか、を判断するのが困難なケースがある。沖縄戦のように、日本軍によって「軍官民共生共死の一体化」（「報道宣伝防諜等二閑スル県民指導要綱」一九四四年一月一日）を一般住民が強制され、地上戦に巻き込まれて多数の犠牲者が出ていた状況では、冷静で客観的な証言を生存者に求めること自体、過度に心理的な重圧がかかるのは避けられない。文部科学省の教科書検定において、一九八二年には日本軍による住民の虐殺、二〇〇七年には集団自決における日本軍の強制を削除するという検定意見が示された。集団自決の強制が削除されるのをマスコミ報道で知った沖縄県民は、宮古と八重山をあわせて十一万人以上が参加する大規模な反対集会を開いて、検定意見の撤回と記述の復活を求めた。集団自決は軍の命令や強制、誘導によるものであったとする住民——軍の加害責任を明確にするために、「集団自決」とは呼ばずに「強制集団死」の言葉を選んで使う——に対して、政府は集団自決を住民がみずから犠牲的精神を発露したとする殉国美談に仕立て上げようとしていたのである。

## 尾西康充

さらに、家永教科書裁判第三次訴訟や新沖縄県平和祈念資料館展示改竄事件、大江岩波沖縄戦裁判などを通じて、沖縄戦をめぐる歴史認識の相違が政府と県民の間で一層表面化していった。だがこれらの対立とは別に、「戦傷病者戦没遺族等援護法」（一九五二年）の適用拡大のプロセスにおいて歴史が書き換えられていくという問題が生じていた。米軍占領下の沖縄には、本土なら当然支援を受けられるはずの軍人軍属でさえ援護法が適用されていなかった。国内で唯一の地上戦を体験したという特殊事情を考慮した政府は、一九五七年に、軍人軍属はもとより一般住民の犠牲者にも対象を拡大し遺族給付金が受けられるように閣議決定した。だがそこには重大な陥穽が潜んでいて、認定を受けるためには、一般住民が戦闘に積極的、に参加して戦死したことを証明しなければならなかった。政府が示した、戦闘参加者として取り扱うべき二〇〇例のなかには、食糧や壕<sup>ガタ</sup>の提供に加えて集団自決が含まれ、それらに該当すれば準軍属とみなされて「援護法」が適用された。たとえば母親が窒息死させたゼロ歳児であっても遺族年金が給付され、軍人同様に祭神として靖国神社に祀られることになったのであった。このような対応策が講じられた背景には、沖縄県民の不満が蓄積し、アメリカ統治を揺るがすような暴動にまで発展しかねない

という危惧を、日本政府が抱いていたということがあった。石原昌家氏は、「復帰」以前から沖繩は「日米両政府による軍事植民地状態の沖繩とヤスクニ化された沖繩という、同質の二重構造の社会」になつてしまつていたと批判する。<sup>1)</sup>

ちなみに二〇一五年四月六日、文部科学省は翌年から中学校で使用する教科書の検定結果を公表した。教科書会社八社のうち七社が集団自決に関する事項を記述した。そのなかで教育出版株式会社、集団自決を「強いられた」から「追い込まれた」へと自主的に変更したために、日本軍による強制を明記した出版社が一社もなくなるという事態におちいつてしまった。

政府による歴史の書き換えが狡猾におこなわれるなか、沖繩戦の記憶を文学作品のなかで語り継ぐとしていたのが目取真俊である。沖繩女性史家宮城晴美との対談のなかで、彼は「沖繩の戦場にはいろんな人間がいたわけで、それをどうやって描いていくか。証言の中では伝えられなかった、残されなかったものを、どうやって考えていくかということが大切だと思います」と語っている。<sup>2)</sup>

一九六〇年、沖繩県国頭郡今帰仁村に生まれた目取真は、戦争をみずから体験した世代ではない。だが高校生まで故郷で過ごし、今帰仁方言を使っていたという彼に向かって、一四歳で鉄血勳皇隊に参加した父親や、壮年期を迎えて戦争に巻き込まれた祖父母たちが《島くとうば》で自己の体験を語った。目取真によれば、それらの体験談は「歴史として整理される以前の、一人一人の生々しい痛みを持った記憶」である。それを「小さいころから繰り返し繰り返し聞いて、話される場面場面の中で映像として思い浮かべてきた」。沖繩戦風化の危

機が叫ばれた大学生時代、大量に出版された体験集や研究書を入手し、「もう少し相対的に、視点をアジアにまで広げて読む」ことを通じて「自分の追体験を核に沖繩戦をいろんな角度から考えた」という。<sup>3)</sup>

沖繩戦の体験をどのように継承するのか。自己の記憶を「語っている人も語れない人も、その双方の心の中の葛藤や、苦しみ、弱さも見つけていかないと、人間をほんとうに見ることにならない」という視点から描かれた、目取真の小説「風音」を取り上げて検討してみよう。

## 2

「風音」には、基本的に三つの本文がある。初出は「沖繩タイムズ」（一九八五年一月二六日〜八六年二月五日）、単行本には『水滴』（一九九七年九月、文藝春秋社）に収録された。二〇〇四年の映画化にもなつて大幅な加筆修正がおこなわれ、『風音 The Crying Wind』（二〇〇四年四月、リトル・モア）が刊行された。「死者の声の残響としての音に恣意的な意味づけを行う手前で踏み留まり、出来事を未了の状態に留め置く音といかに向き合うことができるか」というテーマに着目し、一九九七年版で作品の完成をみたとする村上陽子氏の説に従つて、本稿では一九九七年版を取りあげる。<sup>4)</sup>

沖繩戦から四〇年が経過した、六月の近づいたある日、当山アキラは友人の少年たちを連れて、入間川の河口に面した崖にある古い風葬場の跡に出かけた。「所々に艦砲の跡が残る黄褐色の岩肌を剥き出しにした崖」の一角の中腹にある窪みには、「泣き御頭」と呼ばれる頭蓋骨がおかれていた。「左のこめかみのあたりに小指が入るくらいの

穴」が開いている。海からの風が眼窩を吹き抜けるたびに、空洞に反響して風音を発する。友人に唆されたアキラは、テラピアの入ったマヨネーズの大ビンを頭蓋骨の横におきにくく。遺体は「数十年の間、風雨にさらされ、汚れを落とした一体の美しい白骨」と化していた。遺体はうつぶせに横たえられ、頭蓋骨は本来あるべきはずの位置にはなく、窪みの入り口の縁石のうえにおかれていた。アキラには、それがまるで「何者かの手で動かされた」ように感じられたのである。「深い眼窩が遠く海を見つめていた」——遺体がそこに運び込まれたいきさつは、アキラの父親清吉が知っていた。

米軍が沖繩に上陸して一カ月以上が経ったある日、山中の洞窟がまに避難していた清吉は、食糧を手に入れるために、父親の喜昭とともにマングローブの泥のなかを歩いていった。そのとき偶然、満ち潮によって漂着した若い兵士の死体を発見した。昨日の攻撃で敵艦に突入できずに海上に不時着したのだと思われた。風葬場まで運び、泥にまみれた特攻服を脱がしてみると、「まだ二十歳前にしか見えない若者の体は、傷らしい傷もなく、腐敗も進行していないようだった」。清吉にとつて、それまで目にした死体が「ほとんど腐乱して膨らみ、皮の破れたところから悪臭を放つ汁を流して蛆がたかっていた」のに比べ、「美しい死に顔」だった。「こういう死に顔もあるのかと奇異な感を抱かせるほど穏やかな表情」をしていた。「痩せてはいるが柔らかな線を失っていない肉体の中央に茂った陰毛が生々しく、清吉の目をとらえる」という描写からは、ホモセクシュアルな欲望が感じられる。このような欲望そのものを描き出すことが作品の主たる狙いであれば、それには一定の評価を与えることができるかもしれない。だが自決した

特攻隊員の漂着した肉体という設定を考えると、このテキストが図らずもさまざまな読み方を許しているといえる。

たとえば、つぎのような社会的コンテキストにおいてみると、この作品からちがった意味が生じるだろう。二〇〇〇年四月、新沖繩県平和記念資料館が開館された。企画段階では、壕のなかに避難していた住民に日本兵が銃剣を向けていた。だが稲嶺恵一沖繩県知事が「反国家的な展示はいかがなものか」との異論を持つと、事務当局が知事の意向を汲んでそれを撤去しようとした。監修委員会への相談や事前通告もなく無断で展示を変更しようとしたことに、大城将保・石原昌家同委員たちが猛烈に抗議した。結局は元の企画通り展示されることになったのだが、「避難民に銃剣を向ける日本兵」の展示を批判し「なぜ特攻隊を展示しないのか」という難癖をつける投書があつたという。それに対して、大城・石原両氏はつぎのように反論している。

もちろん資料館では特攻機の出撃を説明した展示もちゃんとあるが、投書者が言いたかったことは「日本兵の悪い面だけでなく特攻隊のような尊い姿も展示すべきだ」というのが真意だったのである。しかしそのような発想はかつて「ひめゆり神話」で沖繩戦を殉国美談に描こうとした政府筋の発想とウリ二つである。数千の特攻機の墓場となつた沖繩の戦場には数十万の目撃者が彼らの無惨な末路を見届けているのであり、誰があのような残酷な特攻を命令したかと考えれば、特攻隊といえども決して美化して描くことはできないのである。

「美しい白骨」と「美しい死に顔」——この作品における遺体は、殉国美談につながる読み方を許してはいないか。国民学校に通つてい

た頃、「戦闘機に乗ることは誰も憧れ」だった清吉には「若者の死体に傷ひとつなかったのが天才的な戦闘機乗りであったからだと思えた」とある。高口智史氏は、単行本収録時に加筆された作品結末部分に着目し、これとは逆の読み方を示している。「泣き御頭」が破碎した後も消えることがなかった風音は「戦後の時空を彷徨う特攻隊員の怨嗟の声」とし、死者に対して罪の意識を持つ生者が構成する村落共同体、および「儀礼としての追悼」に呪縛されてきた戦後日本を糾弾するものであると意味づける。この読みに対しては、村上氏が「風音に「怨嗟の声」という意味が充填される時、死者の言葉の埋めきれない空白が切り捨てられ」てしまうと、「死者の声が断定的な意味づけを拒み、音として響いているという点に立ち止まって考察を進めていくことが重要となる」と指摘している。美談か糾弾か、あるいは空白のまま判断停止しておくべきか、死者の声の領有をめぐる闘争がここに現出している。だがそれは沖繩の集団自決をめぐる歴史記述と同質の問題であるともいえ、表象のポリティクスを争点とするケースになっている。

一九四五年四月六日から六月二二日までの間、沖繩に一九〇〇機の特攻機が投入された。大学から学徒動員された予備将校や少年航空兵が出撃した。陸軍機には一七歳、海軍機には一六歳の若者も搭乗していた。練習機を改造した粗悪な機体と訓練不足、米軍の周到な迎撃態勢などの苛酷な状況におかれ、実際に命中したのは一割あまりしかなかった。無数の特攻隊員の遺骸が沖繩県北部の海岸に漂着し、今帰仁村の運転港から四〇キロ北にある伊平屋島には、不時着して運よく救出され、住民にかくまわれていた特攻隊員が数名いた。乙羽岳に避難

していた今帰仁村仲宗根の住民は、特攻機が連日飛来していたが米軍艦から一斉に高射砲が発射され、空中で爆発し黒煙を残して墜落していたことを覚えていた。

一般に沖繩では、「自殺や溺死者、ハンセン病、ハブにかまれて死んだ人」は「ヤナジニ（悪死）」といって忌み嫌われる。非常死をとげた人の霊はまつられざる霊なので、それが浮遊霊になって祟っている。指さしただけでも祟られるし、風葬がおこなわれる崖には絶対に近づかない。だが喜昭はひたむきな態度で遺体に向き合う。その遺体が若者であったからなのか、特攻隊員であったからなのか、非常死をとげた者であったからなのか、喜昭のそばにいた清吉にはまるで見当がつかない。月明かりの下、米軍の機銃掃射を浴びせられる危険をかえりみず、夜明けまでに壕に戻れるのかも分からないのに遺体を運び、崖を「心もとない足どりで必死に登っていく父の姿に胸を打たれ」さえたのである。喜昭は「懐から取り出した手拭でいねいに遺体をぬぐい、全身を清らかな砂でまぶしはじめる」。すると「異様なまでに白く若々しい肉体」は「朝の冷気にさらされて燐光を放っている」ようにみえた。「耳殻の細かい髪や臉の裏側まで念入りに泥をぬぐいとる」と、頭をそつと砂のうえにおいた。そのとき「左のこめかみに銃弾の貫通した跡」のあることに清吉は気づいた。

「お父」

小さく声をかけた清吉は、父の苦悶の表情を見て驚いた。両手を合わせ、跪いて小声で祈っている父は涙を流していた。砂の上に仰向けに横たわった若者は大和人に間違いなかった。父がなぜ泣いているのか分からないまま、戸惑った清吉は目をそらし若者

を見た。

いかなる遺体にも畏敬の念をもって処しなければならぬ。それは人類普遍のモラルである。だが息子の清吉にも理解できないほど、喜昭の面持ちは悲痛に満ちていた。その理解のできなさは、痛哭する死の絶対性を示しているのではないか。この絶対性は一人の若者の死を——彼の死にまつわる歴史を停止させて——、死そのものの厳肅さをもつて受け止めることを要請する。それは物悲しい風音を耳にすれば「誰の胸にも犯すことのできない畏れが生じる」とされていることに通底する。安易に殉国美談にまつりあげられることを拒絶しているのである。

小説は虚構である。どのような解釈であっても許容されるのかもしれない。しかし、特攻隊員が自決していたとすると、銃弾の貫通した跡が「左のこめかみ」にあるのは適切だろうか。特攻機が不時着した場合に備え、搭乗員は自決用の拳銃を所持していた。日本軍兵士はみな、利き腕が右手になるように訓練され、銃器も右利きのものしか製作されていなかった。右利きであれば「右のこめかみ」に銃口を当てるはずなのだが——。

### 3

沖繩へ校外実習にいった女子学生がひめゆりの塔の平和祈念資料館を見学して、「私はもう嫌だった。戦争の惨事は確かにこれでもか、これでもかの砲撃だったのだ。それくらい分かっている。この資料館の悪意が嫌なのだ。悪意と呼ぶには余りにも失礼なら死者とその生き

残りの者、その同窓生たちの怨念が嫌だったのだ」という感想を報告書に記した。案内役を務めた沖繩の学生たちがこれを読んで憤慨し、反論集を編んだ。自分の教え子もそのなかに含まれていたという加藤典洋は、壺聲を買った女子学生を擁護し、いかに「認識不足」「不勉強の結果」と批判されようとも、「自分の最初の反応、唯一の考える足場を、自分で守ってやれ」と励ましたのである。<sup>(1)</sup>だが、記念館はそもそも、自分もそこにいたかもしれないという実感を抱かせ、追体験を可能にするための展示をおこなっている。そして何よりも、死者の追悼を目的とする場である。学習のために追悼施設を訪れるのであって、テーマパークに遊びにきたわけではない。女子学生は「それくらい分かっている」と報告書に記していたが、何がどのように、それくらいなのか、本当に分かった人間ならこのようには書かないはずである。初発の感想を自己の内面でとらえ直し、他者に対する理解を深めるプロセスを経験することが目的であって、初発の感想にとどまってしまう。「それくらい分かっている」というのは開き直りにすぎない。

他方川村淳によれば、女子学生の発言が沖繩の人びとの神経を逆なですることになったのは、「何よりも沖繩戦の「悲惨」さを「もう嫌だった」と拒絶する」が「沖繩が「本土」に対して持つ自分たちのアイデンティティを主張する権利を否定することになる」からであった。「沖繩植民地論であれ、琉球独立論であれ、沖繩戦の悲劇や悲惨さを前提とし、それを「本土」に対する自分たちの自己同一性、言葉を換えれば「自己完結」性の根拠としているように思われる」という<sup>(1)(2)</sup>。そして、もし「観光地的な沖繩」「基地問題の沖繩」といったステレオタイプな沖繩イメージを目取真が否定しようとするのなら、「沖繩

の「本土」に対するアイデンティティーの主張である「沖繩戦」の沖繩、悲劇の「ひめゆり」の島としての沖繩をまず否定してゆかなければならないことは明らかだろう」という。

戦争の記憶を抹殺したいわけではない。沖繩戦の記録の価値を否定したいわけでもない。だが、終局的には「恐怖」の強制と、死者や生き残った人たちの「怨念」に対する全面的な承伏しか許さない戦争と戦場の「体験」や「記憶」の特権性に対して、「沖繩文学」のなかから自己批判が湧き上がってきたといえるのである。<sup>103</sup>

川村は「体験」や「記憶」の「特権性」という言葉を使っているが、目取真の文学はそれらに対するウチナーンチュ（沖繩人）としての「自己批判」であったのだろうか。目取真は「恐怖」の強制を避けるために、自己の作品のなかで「美しい白骨」と「穏やかな表情」の描写をおこなったのだろうか。たしかに目取真は沖繩の地域社会への批判意識を持っている。彼によれば、「沖繩的な土壌」は「小説を書く上ではマイナス面も大きいと思います。書き手がダメになっ  
ていく要素がたくさんある」。 「共同体としての力がまだ強いんです  
が、それは同時に、個の自立を抑圧する力が強いということでもある  
んです。共同体が、個人の過激な部分の角をとって丸め込んで、なし  
崩しにしてしまう」という。<sup>104</sup> 共同体への同調圧力に抵抗し個人の自己  
意識を高めることが必要とされる。作品創作の現場にとどまらず、戦  
争体験の証言に際しても、地域社会からの圧力が加えられる。  
目取真が沖繩の共同体への違和感を唱える背景の一つには、沖繩に  
も戦争に協力する人びとがいたことがあげられてしまうからである。

沖繩島北部では、日本軍が壊滅した後も、ゲリラ戦をおこなう遊撃隊  
—— 国頭支隊（宇土武彦大佐）—— が山岳地帯に潜伏して残っていた。  
運天港の海軍特殊潜航艇基地——海上特攻用の艦艇が密かに配備され  
ていた——の隊員たちも、基地が壊滅した後、陸に上って遊撃隊に加  
わった。だが米軍に次第に追い詰められた彼らは、住民を脅迫して食  
糧を徴発する一方、協力者や密告者を組織化して住民の生活を監視し、  
自分たちの要求に応じない住民にはスパイの汚名をきせて拷問して虐  
殺する事件が相次いだ。今帰仁村では、日本軍が撤退し米軍占領下の  
戦後生活がはじまってから、警護団長や英語通訳が敗残兵によって惨  
殺されるという虐殺事件が三件発生し、あわせて五名が死亡した。<sup>105</sup> 秘  
密基地の存在が米軍に知られていたのはなぜか、住民のなかに軍事機  
密をもらした人間がいるのではないかという疑いがかけられたのであ  
る。目取真によれば、「住民の中に日本軍に組織化された密告者がい  
たことは、私も肉親から聞いている。私の叔母は「日本軍のスパイ」  
と言っていた」という。米軍と昼間接触していた住民をこっそり日本  
軍に知らせる協力者が住民のなかに組織されていたのである。

今帰仁村で日本軍に虐殺された住民のひとり、私の中学の同  
級生の祖父である。別のひとりは小学校の先生の兄である。私の  
父や祖父も日本軍に命を狙われた体験を持ち、日本軍の住民虐殺  
は私にとって身近な過去の出来事だった。<sup>106</sup>

「風音」では、戦争体験の証言に関して石川徳一区長が一四歳のと  
きに鉄血勤皇隊員となって従軍した体験を語る場面がある。海岸沿い  
の岩穴で爆弾を抱え、米軍の戦車が来るのを待っていたときの光景を  
「得意気に喋りはじめた」。だが「陸の特攻隊」であった過去を語る

うとすると、すぐに話の腰を折られてしまう。一四歳以上の少年が防衛召集によって動員された鉄血勤皇隊は、弾薬運びから爆雷を抱えての斬り込み攻撃まで、軍人と同じように、あらゆる任務に就かされていた。彼らは一つの村で年に数名しか進学できないエリートたちで、皇民化教育を徹底的に叩き込まれ、戦闘に参加することが臣民としての義務だと考える生徒もいた。実際に動員された一七八〇名のうち八九〇名が戦死している。「得意気に喋りはじめた」徳一の語りには、自分に都合が良いように嘘と虚構が加えられている。年齢の割に身体が小さく召集を免れた清吉であっても、一緒に山中を逃げ惑った「父や母に対してさえ、あの強烈な事実だけがあるいと重ねられた日々を過ごしてからは、いくら言葉をやしても本当のことは伝わらないと感ぜられた」のである。戦争の体験を真摯に語ろうとするならば、死者を悼む気持ちと同時に、自分が生き残ったことの負い目を感じずにはいられないだろう。住民がこれまで「泣き御頭」のことを村の外に積極的に知らせようとしなかったのは、「戦死者のことをむやみに口にするに、負い目のような感情を生き残った者らが感じていたから」だとされている。

さきに紹介したように目取真の父親も徳一と同じく、鉄血勤皇隊に一四歳で動員された。銃を手に米軍と闘った体験は「おおよそ殉国美談とはかけ離れたもの」であったという。<sup>(17)</sup> 目取真は沖繩戦の特徴について、「住民を巻き込んだ地上戦の中で、友軍と呼んで信頼を寄せていた味方の軍隊から、虐殺や暴行、食糧強奪、壕追い出しなどの仕打ちを受けるという体験は、ヤマトウではなかった」ことを強調している。<sup>(18)</sup>

「風音」では、沖繩戦のドキュメンタリー取材のためにテレビ局の

藤井安雄が本土からやってくる。「泣き御神」の噂を徳一から聞いた藤井は、自分も同じ日に出撃するはずであった特攻隊員の加納の遺骨ではないかと感じている。「泣き御神」の取材を認めるかどうかで清吉は徳一と争論になるのだが、そのとき「突然、左のこめかみから右耳の後ろに激しい痛みとともに甲高い音が突き抜けた」。清吉は「親指と薬指で側頭部を押さえ、うずくまって痛みを耐えた」とある。これは特攻隊員が拳銃で自決した瞬間を自分の身体において再現しそのときの痛みを共苦しているのであって、この「甲高い音」は射撃音であるといえよう。ここに至るともはや、こめかみのどこに弾痕がのこっていたのか、が重要ではなく、非合理的な現象を通して自分の身に起きたこととして特攻隊員の死を引き受けているのを読みとることが求められるのである。

## 4

右の場面のほかに、登場人物が入れ替わる場面がいくつかある。「泣き御頭」のおかれた風葬場の崖で、清吉と藤井は偶然顔をあわせる。二人とも密かに頭蓋骨をたしかめにきたのであるが、ヤマトウグチを話して取材を申し入れる藤井に対して、清吉はウチナーグチで拒絶する。崖下から二人が走って帰る途中、石灰岩の石塊の径で清吉はゴム草履を失くし足の裏に裂傷を負う。吊り橋の上で勢いあまって歩調を乱し、大きく前にのめる清吉の姿を藤井は目の当たりにする。

「危ない」

藤井は飛びついて作業着の襟首をつかみ、橋板から上半身をは

み出してもがいている清吉を助け起こした。振り向いた清吉の目に、特攻隊の若者の顔が青白くぼんやりと映る。清吉は手を突き殺しそうな恐怖とともに、内臓の感触が指先に感じられるまで強く抱きしめたいという喘ぐような衝動に襲われた。肩をつかんでいる細い指を強く握りしめ胸に引き寄せた。だが、すぐにやせたいを突きとばすと、清吉は集落の方に走りつづけた。

藤井は、吊り橋から落下しようとする清吉の襟首をつかんで助けようとする。このとき清吉の目には、藤井の顔が特攻隊員の若者のようにみえた。村上氏は「ジェンダー的・植民地主義的な構造によって分断されている他者に対して、清吉が憎しみと同時に届かぬ愛をも感じているということからは、憎しみの対象としてあらわれる他者をすでに愛してしまっているという構造を読み取ることができるのではないか」と指摘している。<sup>19</sup>この場面でもホモセクシュアルな欲望が噴出していることが分かる。初出版「風音」を読めば、清吉が欲望を抱いていた相手は藤井ではなく特攻隊の若者であったことが明確になる。初出版では「清吉」の名前は「清裕」とされている。父と風葬場から戻ってから、清裕は「今朝からずっと押さえようとして押さえきれない思いがこみ上げてきた。死んだ特攻隊員の美しい体が鮮やかに目に浮かんだ」（第一八回、一九八六年一月一四日）、「若者の死体が傷口とつなく美しかったのも天才的な戦闘機乗りであったからだと思われた。汚れない砂に横たえられたあの若者の神々しい体をもう一度目にしたかった」（第一九回、一月一五日）とある。万年筆を手に入れたことは「羞恥心からはつきり意識することは避けていた」とされ、この時点では、若者の死体をみることも万年筆を拾うことも同じよう

に欲望の対象とされていたのである。この作品においては、特攻隊員の死を美化するというよりも、彼の壮健な肉体の美しさにひかれるところに重要なモチーフがあったと思われる。

これ以前に、落下する藤井の襟首を特攻隊員の加納がつかむという場面があった。藤井と加納は一九四五年五月一七日に出撃する予定を知らされた、出撃前日の深夜、二人は兵舎の裏にある崖を登った。崖の縁に腰をかけた加納が「つまらなくはないか」と口にした。自分の死にあらゆる意味づけをおこなおうとして、結局はその空虚さに気づくしかなかった藤井にとって、その言葉は最も恐れていた問いであった。そしてふと、今まで誰よりもニヒリストを気どっていた加納が、実はひどい恐怖感に耐えかねているのではないかという気がした。加納はタバコを吸うために火を貸してくれと藤井にいう。

藤井はポケットをまさぐりマツチを捜した。一本擦って差し出したが、それはすぐに風にかき消された。加納は煙草をくわえて顔を近づけた。火の中に浮かんだ顔は驚くほど幼かった。藤井は痛々しい思いに駆られておもわず目をそらした。火照った耳にやわらかな息がかかり、かすれた低い声が何かをささやいた。

「えっ、何？」

振り向いた唇にやわらかいものが触れた。と思った瞬間、襟首をわしづかみにされた藤井は、闇の底へ放り出された。

「振り向いた唇」に触れた「やわらかいもの」とは——空白に意味を充填させることの暴力を戒めながらも——加納の唇であったかもしれない。ホモセクシュアルの濃厚な欲望が伝わってくる場面である。

ここでは落下する藤井の襟を加納がつかんでいるが、さきの吊り橋の

場面では、藤井の襟をつかむのは清吉であった。襟首をわしづかみにされて放り出された藤井は、「手足をはじめ数カ所骨折した他に脊髄を痛めていて絶対安静」の重症を負う。転落したのは事故であったと加納が供述してくれはしたが、特攻を忌避するために自ら投身したのではないかと憲兵から疑われることになった。

藤井が戦後、特攻隊員に関わるドキュメンタリー製作の仕事をするようになったのは、「語られることのなかった彼らの胸の内」を伝えるためであった。「加納は何かを訴えたかったのだ。そのためにこそおれを生かそうとしたのではなかったか」と思うのだが、どうしてもその最後の言葉を思い出すことができない。たとえ思い浮かんでも「恣意的な匂い」のしないものはない。「加納によって生かされた者として、死んでいった者らの生と死の姿とその意味を明らかにしていくことが自分の責務」だと信じる一方、「同僚を裏切って生き延びることに賭けた自らを永遠に断罪していくために」映像を撮り続けてきた。だがそれらはすべていい訳でしかなく、「おれはただ生き延び、自らを慰めるために加納の幻影を追っていたにすぎない」と思うようになる。すべては「無意識のうちに自分が仕組んだもの」ではなかったのか、そもそも加納が実在する人間であったのかどうかも疑わしく感じられるようになり、加納との最後の場面も「自分が無意識のうちに創り上げた偽りの記憶のような気がした」のであった。

加納を悼む藤井の気持ちにあまり残っていることは、加納の両親や兄妹が健在であることを二〇年以上も前に知り、母親の姿を遠くからたしかめることさえしていたにもかかわらず、取材には決していかなかったことから明らかである。ただ一人生き延びてしまった

自分には、死んだ战友への疚しさ——タンカで後送される自分に投げられた「寝不足と激しい憎悪で赤く膨れあがった仲間の目」——が存するのであった。結果的に出撃を取りやめることのできた加納との最後の光景は、自己正当化に都合の良いように無意識の下で変形され続けているのである。

このあいまいさは、実は清吉も同じで、彼は特攻隊員の死を悼むこと以上に、万年筆を盗んだことが発覚することを恐れ続けている。風葬場で万年筆を手に入れて洞穴をのぞき込んだとき、遺体は蟹の群れによって「目も鼻も見分けることのできない黒い残骸」と化していた。清吉は「深い闇をつくっている口腔が誰かを呼ぶように動いている」のを目撃し、ふと「若者の喉から漏れたかすれた音を聞いた」。「死者が最後に身につけていたものを盗み取ったという意識」は、年を経るに連れて「単なる恥辱感」から「死者を汚したことへの恐れ」へと変わっていった。「万年筆を一本取ったくらいで、どうしてこんなに苦しまなければならんか、と思った。けれど、忘れたと思った頃ふいに訪れるものがなししい風音を耳にすると、どんな言い訳も自分の恐れを解くことはない」と知った。戦後、戦没者の遺骨收拾がはじまると自分の盗みが露見しないように、清吉は「泣き御頭にだけは誰も手を出さないよう、恐怖を煽りたてる噂」を流したのであった。清吉の個人的な「恥辱感と恐れ」が原因となって「泣き御神」の伝説が形成されていったのであった。

共同体の集合的記憶は、個人の「恣意的な匂い」の影響を受けて再構成される。それが記録されて歴史となる。客観的かつ公正なものは決してない。石原氏によれば、戦後になっても戦争責任を問われる

ことなく指導者層を形成していたために、沖繩の地域社会では戦争体験を客観的かつ公正に語る事が妨げられてきたとする。

戦後、県民は戦争体験を個人レヴェルにおしとどめ、沖繩戦の本質を見極めるべく地域の戦争指導者層の戦争責任の追及を欠落させてきたのである。そのことが今なお沖繩戦の実相が明確には把握されることなく謎に包まれている部分をかなり残している原因でもある。戦前の翼賛体制下の村落共同体がその共同体的規制を通して各成員に天皇制イデオロギー注入の補完的役割を果たし、国家意識として侵略戦争の国策を受容させていったのであるが、そのメカニズムの推進役を担った地域の戦争指導者層が、戦後、なんら戦争責任を問われることなく依然としてムラ（村落共同体）の指導者層の地位につくことをその成員は容認してきた<sup>(20)</sup>。

歴史は歪曲される。それは個人の「恣意的な匂い」が原因である場合もあれば、地域社会の権力関係が原因である場合もある。貧農の清吉は、狭い村のなかで破壊され尽くした生活を復興してゆくためには、村で有数の富農であった徳一の家のツテを頼らざるを得なかった——初出版「風音」では、「屈辱に耐えながら虚偽の言葉の繭（まゆ）で自分を覆い、物資をまわしてもらった」（第一〇回、八六年一月六日）とある。地域社会に張りめぐらされた権力関係は、証言を封じ記録を歪めてしまう。改竄の痕跡さえとどめずに歴史は再構成されるのである。

「風音」の結末に近い場面で、「泣き御頭」が泣かなくなつたという噂を聞いた藤井がそれをたしかめるために入神川の河口へ向かう。沖繩戦や特攻隊の取材をするのがこれで最後になるかもしれないとい

う「体と心の奥底まで蝕んだ疲労感」を感じていた。一時は社会派ドキュメンタリーとして高い評価を受けた藤井の番組も、今ではスポンサー探しに四苦八苦の状態で、放送枠も深夜にまわされて予算も大幅に削られていたのである。河口への径を歩いていると、藤井の耳元でふいに「やりきれなくはないか」という加納の声がした。それは出撃の前夜「つまりはならないか」と口にした加納の言葉の回帰であった。記憶はそれを語る人間の内側から再生し、表現を換えて反復される。死者の声は外から聞こえてくるわけではない。死者とかかわりのあった生者の内から響いてくるのである。アキラが大ピンをおいて「泣き御頭」が泣かなくなつたといわれた後も、藤井と清吉の耳には風音が聞こえている——初出版「風音」では、藤井が吊り橋から落ちる場面の直後、「風音はいっそう鮮やかに清裕の頭蓋の奥深く入っていくのだった」（第二二回、八六年一月一八日）とある。

だが、藤井は自分が最後に耳にした、加納が「かすれた低い声」でささやいた「何か」の内容が分からないまま苦しんでいる。自分ひとりが生き残ってしまったという負目のために、みずから出撃を忌避したとみられかねないあの夜のできごとの記憶を抑圧しているのである。あのときの光景をどのように再現しようと試みても、どうしても納得がゆかないのは、結局彼が戦友の死に向き合おうとしていないからである——加納に襟をつかまれて崖から落とされたとすれば、罪の意識を転嫁できるのである。他方清吉もまた、万年筆を手に入れたときに聞いた「若者の喉から漏れたかすれた音」の正体が分からない。死者が後生に旅立つ不浄の聖域を汚したことへの畏れを抱いているために、盗みを働いたときの光景を冷静に想起できず、若者はそのとき

生きていたかもしれないという幻想を抱いて苦しむ——本当に若者が生きていれば死者を冒瀆したことはないのである。

どちらのケースも罪の意識から逃れたいという潜在的願望を充足するために、記憶に《検閲 (Zensur)》が加えられているのである。死者の声——《声なき声》そして《音》——は、生者の心理的圧力によって封じ込められている。消されてしまいそうな声の痕跡をたどって、葛藤を繰り広げる様相を描き出そうとするところに文学固有の領域がある。

## 5

「泣き御頭」が泣かなくなったという噂を聞いたアキラは、「神聖な場所を汚した者に加えられるという様々な罰の言い伝えが脳裡をよぎった」。藤井が河口に向かって歩いていたとき、万年筆を返すために清吉も、風音が聞こえなくなった原因のピンを取るためにアキラも、風葬場の崖を目指していた。歩きながらアキラは「はるか以前にもこのヤドカリを見た記憶があった」と感じるが、四〇年前に同じ場所ですべての「子供の頭蓋骨ほどもある大きな白い巻貝を背負ったヤドカリ」を目撃したのは、万年筆を手に入れようと走っていた清吉であった。清吉、アキラ、藤井の三人の耳に聞こえる風音は、胸奥にあるわだかまりから発せられるものであった。

「泣き御頭」に手を伸ばしたアキラは、左のこめかみにある穴に気づく。「二つの眼窩から吹き込み、頭蓋の中で反響し、男の命を奪ったこめかみの傷口から漏れる風の音」が「泣き声の正体」であったこ

とをはじめて知る。眼窩からのぞいた蟹の爪がいきなりアキラの指をはさむ。アキラは渾身の力で頭蓋骨を投げ捨てた。人差し指の肉が生爪ともども噛み切れ、熱い血が滴り落ちる。アキラは「左手で傷ついた指をきつく握りしめると、それを胸に抱くようにしてうずくまり、低く呻いた」。すると「今にもちぎれそうな昼顔のつるに必死にしがみつぎ、汗まみれの顔を歪めて目を見開いている」清吉の目の前にあらわれた。

他方、藤井は落下する頭蓋骨を受け止めようと地上を走っていた。

## 「加納」

藤井は落下する頭蓋骨を受け止めようと走った。ものがなしい音が藤井の胸を貫く。揺らめく明かりの中で加納が最後につぶやいた声はこの音であったような気がした。腕を伸ばしてダイビングした指先をかすめて、泣き御頭は藤井の目の前で白く砕け散った。

両膝をついて頭蓋骨の破片を見つめた。

## 「藤井」

頭上から喘ぐような声で誰かが叫んだ。榕樹の枝から垂れた昼顔のつるにしがみついている男の顔が、月明かりに浮かぶ。その傍らに胸の前に手を組んで深い祈りの姿勢をとっている少年の姿があった。

この場面には、出撃前夜藤井が崖から落ちた光景が反復されている。あのかきは落下する藤井の姿を崖上から加納がみていたのだが、ここでは加納と思われる頭蓋骨が落下し、崖上から清吉がみついている。落下する頭蓋骨は、作品の冒頭近く、大ピンをおいた直後に数匹の蟹に驚

いて落下したアキラの姿に重なる。村上氏によれば、「ずれを伴って反復される出来事において、清吉と藤井は互いの記憶の中に存在する死者の位置を担っていく」とされ、「出来事の記憶が別の者によって生きられていく可能性を示しているように思える」という。<sup>(2)</sup>

死者の声は生者が代わって発し、死者の記憶は生者が代わって証言する。しかし、「死」そのものは「生」の外部にあるため、だれも直接それを語ることはできない。その一方「生」は「死」によって限局されるため、「死」との関係を通じてのみ「生」の同一性をたしかめられる。清吉は「若者の喉から漏れたかすれた音」、藤井は加納の「かすれた低い声」にとらわれながら、戦後四〇年の歳月を生き延びてきた。死者とともに生きる人間の現在に「死」が痕跡として憑依し、死者によって生者は生かされることになるのである。

しかし生者の同一性を引き裂いてしまう死者の声がある。それは清吉や藤井のように死者との体験がトラウマになっている場合で、生者は心理的な防衛メカニズムを作動させ、死者の記憶を、自己保存のために合理化させたものに変形するか、あるいは回帰しないように封印してしまう。

さらに、この場面で着目すべきは「胸の前に手を組んで深い祈りの姿勢をとっている少年の姿」である。特攻隊員の若者の遺体に向かつて悲痛に満ちていた喜昭の面持ちを想起させる。あのときもアキラには、なぜ泣いているのか分からず、喜昭が「苦悶の表情」をみせていたというのも、アキラの憶測であつたかもしれない。この場面もまた、アキラは傷ついた指を抱えて呻いてただけで、藤井の誤解であつたにすぎないのだが、「深い祈り」という言葉は、このテキストにおい

て死者への悼みを喚起させる——喜昭からアキラへと、清吉と藤井の世代をまたいで継承している——垂直方向に屹立する倫理的志向となつているのである。

沖繩では近世から戦後まで風葬による洗骨改葬がおこなわれていた。海岸の岩穴や洞穴、山中の崖の窪地で風葬された遺体は、死後三〜七年目の七夕の日に洗骨され、厨子甕に改葬される。そして三十三回忌（終わり焼香）が済めば、死霊は神になると信じられていた。作品は戦後四〇年に当たる年が設定されている。「泣き御頭」は慰霊されたといえるのだろうか。そもそも遺体は、あおむけに埋葬しされていたがいつの間にかうつぶせになっていた。頭蓋骨もいつの間にか位置が変わっていた。風葬は、人間には測り知れない自然の力をかりて遺体を葬る方法である。人間の力をこえた「何者かの手」「何か見えない力」の存在が至るところに仄めかされている。「風音」を読む場合、なぜ遺体が動かされていたのかを問うよりも、胸奥にトラウマを抱く生者にその疑念が強く生じていることを読みとるべきである。

「泣き御神」が落下した後、マヨネーズのビンから音がし、飛沫が散る。蟹によって「肉を食いちぎられ、背ビレの付け根の骨まで剥き出し」になりながらもテラピアの生きていたことが分かる。「生きて」とアキラが声を発する。この言葉は一つの象徴形成——蟹に食われながらも若者が生きていたことを信じたかった清吉と、自分の生命を救ってくれた加納が実在の人物であつたことをたしかめたかった藤井との願望が投影されている。彼らはアキラの声を聴くことで自己再生の契機をつかむのである。

藤井と清吉は再び別の人生を歩きはじめる。藤井は、加納の実家を

訪れて「自分に向けられた戦友たちの憎しみに、今こそ裸で向かいあわねばならない」と自分に言い聞かせた。もはや逃避をおこなわず、「戦友たちの憎しみ」と対峙しようとする決意を持つにいたるのである。清吉は「泣き御頭」の破片と万年筆を冲到放ち、「恥辱感と恐れ」から解放されたかのようにみえた。このような二人の別れは、頭蓋骨が落下して破砕された後、藤井がもときた径を戻る途中、吊り橋から落下する場面に象徴されている。

吊り橋まで来たとき、泥にまみれた上着を脱ぎ捨てようとしてバランスを崩した。誰もつかまえてくれる者はいなかった。藤井はそのまま数メートル下の川に転落した。

その一方、川に転落した藤井の姿を、清吉が目撃していた。清吉はアキラを促し、集落の方に歩いた。吊り橋を渡る時、川の中に胸まで浸かり目を閉じて立っている藤井を見た。溺れるほどの深さではなかった。溺れようと知ったことでもなかった。

二人は別れて、それぞれの道を歩みはじめた。しかし、自分に課せられた使命を再認識しても藤井は「深い徒労感」から逃れられず、清吉の「胸の奥の穴」では「風音は消えることがなかった」。わだかまりを払拭できたわけではないが、死者の記憶をお互いの身体をかりて映し出す、相互依存的な主体化の段階を脱したといえるのではないか。だがそれは途上にすぎない。

今後アキラは「泣き御頭」を破砕してしまったことに苛まれるのだろうか。そしてアキラの口から新しい歴史が語られるのだろうか——初出版「風音」では、「恐ろしいことですよ。誰かが壊したんです、恐ろしいことですよ」（第三七回、八六年二月二日）と住民が怯える。

そして「まるで戦争が終わって山の奥から初めて姿を現した時のように、ある者は呆然とし、ある者は泣き、笑い、怒りに興奮しながら、老人から幼い子供たちまで列をつくって村人達が入神川の河口へ足早に歩いている」（第三八回、八六年二月三日）とされるのである。村上氏は「アキラは清吉とは別のかたちで、泣き御頭の記憶にとらわれ、その記憶の中に自分とは異なる痛みを抱えていた二人を内包している」と指摘する<sup>22</sup>。崖に登る父子の関係は、戦時中の喜昭と清吉から、戦後四〇年経った清吉とアキラへと交替した。風葬場周辺の描写も「青色の薄い幕の向こうにアメリカの艦船がぼんやりみえる河口の開けた場所」から、「風いでいた河口の水面にさざ波が走る。川上に登る小魚の群れを風が追い越し、波が静かに輝く」へと変貌している。沖縄から本土に帰った藤井とはことなる意味で、ウチナンチュには過去のできごとに関する葛藤が存続しているのである。

## 6

ところで、藤井が加納に興味を持ちはじめたのは、加納には「少年の面影の残る白皙の顔には不似合いな冷酷さを秘めた影」があると感じたからであった。「そのふてぶてしい態度のために、上官に毎日のように殴られ、それでも苦痛の表情を見せることはまったくなかった。むしろ薄い唇をかすかに歪めて、笑いを漏らしているように見える」とさえあった」という。しかし、加納が「ニヒリスト」であるかのように感じられたのは、加納のことをよく知らない藤井の推測にすぎない。「実はひどい恐怖感に耐えかねているのではないか」ともみえる

し、「痛々しい思いに駆られて思わず目をそらした」ほど、「驚くほど幼かった」ようにもみえる。

軍の厳しい規律のなかで殴られる若者のイメージは——インテリ学生に加納とは随分ことなるが——ウチナンチュのそれでもある。ウチナーグチ（琉球方言）の分かる者が少なく、徴兵検査には通訳が必要ときさえあった。軍からみれば、彼らはわざと分からないふりをして徴集を免れようとしているように訝しがられた。両親が沖繩出身で、一九二七年大阪市大正区に生まれたという男性は、徴兵検査を受けた際、「沖繩からきた県人も検査を受けていたが、言葉がはつきりしなかったので名前を呼ばれても返事をしなかった。それでみんなの前で殴られていたのも、ナイチャーに腹がたつた事柄の一つである」と回想する<sup>(23)</sup>。

部外秘『沖繩県の歴史的関係及人情風俗』（沖繩連隊区司令部、一九二二年）には、「皇室中心主義、体格の進化、勤労主義、文化程度の向上は、本県民に対し第一に要望すべき件にして就中皇室及国体觀念の徹底に就いては全力を用ふるにあらざれば将来英国の愛蘭に於ける悔いを遺す事なきを保し難きものあり」とある。かつてロンドン市内には（NO IRISH NO BLACKS NO DOGS）（アイルランド人と黒人と犬はお断り）という紙が貼られていた。英国への忠誠心が希薄ことから、第一次世界大戦ではアイルランド人は英国軍への徴兵を免れることができた。目取真は、文学が「地方や辺境に向かう」のは「差別性や、異物としての存在を打ち出すことによって、緊張感を出しやすいう場所」だからと主張している<sup>(24)</sup>。

「風音」では、乙羽山がウツパ山と呼ばれてきた理由が語られてい

る。沖繩戦のときに幼児や足腰の立たない老人を背中にウツパ（背負う）して登ったからだとされる。清吉は「あれはちようど今頃の季節だった。背中にひこばえを生やした村人たちの長い行列が、森の奥深く分け入っていったのが、昨日のことに目に浮かぶ」と回想している。それは「伊豆味を追われるように逃げて乙羽岳をめざしていたのは、私達だけでなく山道で大勢の人達が合流して一つの流れになっていた」という今帰仁村の住民の記憶と重なる<sup>(25)</sup>。

歴史は戦争体験者の証言を記録する。証言にならなかつた死者の声、それらのなかには、記録が間に合わなかつたものもあれば、地域社会における権力体制や個人における防衛本能の心理的メカニズムなど、さまざまな要因によって封印されてしまっているものもある。戦争をめぐる記憶は、表象のポリテイクスの影響を避けられず、ヘゲモニー争奪の戦場になっている。死を痛哭する文学は、遺された痕跡を遡及することによって、無意識の領域で抑圧されている死者の声を探り当て、変形された記憶を再構成しようと試みるのである。

### 注

- (1) 石原昌家「サンフランシスコ条約とヤスクニの下の沖繩——構造的差別」を打ち破る道（『社会評論』第一七一号、二〇二二年一月、一〇一頁）
- (2) 目取真俊・宮城晴美「終わらない『集団自決』と、『文学』の課題」（『すばる』第二九卷第二号、二〇〇七年二月、一六六頁）
- (3) 対談目取真俊・池澤夏樹「『絶望』から始める。」（『文学界』第五一卷第九号、一九九七年九月、一八二頁）

- (4) 村上陽子『出来事の残響―原爆文学と沖縄文学』（二〇一五年七月、インパクト出版会、二二九頁）
- (5) 大城将保・石原昌家「監修委員の視点」（二〇〇二年三月、社会評論社、二七一頁）
- (6) 高口智史「目取真俊・沖縄戦から照射される〈現在〉―「風音」から「水滴」へ」（『社会文学』第三二号、二〇一〇年二月、五八〜六四頁）
- (7) 前掲(4)、二二二〜二二三頁。
- (8) 石原昌家『虐殺の島―皇軍と臣民の末路』（一九七八年一月、晚聲社、一一五頁）
- (9) 仲嶺盛仁「今帰仁での戦争体験」証言（企画展今帰仁と戦争、今帰仁村歴史文化センター、二〇一一年七月二五日〜二〇一二年二月二五日、<http://yamaki.info/sensou2.html>）
- (10) 名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』（一九九九年六月、沖縄文化社、五六頁）
- (11) 加藤典洋『この時代の生き方』（一九九五年十二月、講談社、一九二頁）
- (12) 川村湊「沖縄のゴーストバスターズ 風を読む水に書く2」（『群像』第五二巻第九号、一九九七年九月、一五三頁）
- (13) 同右、一七一頁。
- (14) 前掲(2)、一七六〜一七七頁。
- (15) 大城将保『改訂版 沖縄戦』（一九八八年一〇月、高文研、一六四頁）
- (16) 目取真俊「今帰仁の日本兵」（ブログ記事「海鳴りの島から」  
<http://blog.goo.ne.jp/wamori777/e/0f5ab60d700a724f12e87cf44c3a1>  
53b
- (17) 目取真俊「沖縄戦の記憶」（『文学界』第六〇巻第五号、二〇〇六年五月、一五頁）
- (18) 前掲(16)と同じ。
- (19) 村上陽子「喪失、空白、記憶―目取真俊「風音」をめぐる―」（『琉球アジア社会文化研究』第一〇号、二〇〇七年一月、四一頁）
- (20) 石原昌家「沖縄戦と村落共同体」（『沖縄国際大学文学部紀要』社会科学部第四巻第一号、一九七六年三月、五七頁）
- (21) 前掲(4)、二四二〜二四三頁。
- (22) 前掲(4)、二四三頁。
- (23) 上原新太郎氏（昭和二年生、那覇市当間出身二世）の証言（石原昌家「日本本土在沖縄県人の出稼と定住生活の研究（生活記録編―1）」、『沖縄国際大学文学部紀要』社会科学部第一八巻第二号、一九九二年三月、九八〜九九頁）
- (24) 前掲(3)、一八五頁。
- (25) 前掲(9)と同じ（<http://rekidun.jp/talken01.html>）。

**付記**

「風音」の本文は、『水滴』（一九九七年九月、文藝春秋社）に拠った。

（おにし やすみつ、三重大学人文学部教授）